

原子力基礎基盤戦略研究イニシアティブ
「原子カムラ」の境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの試行
第1回外部評価委員会
議事録

日時：平成25年10月31日（木） 15：00～17：00

場所：NPO法人パブリック・アウトリーチ本部事務所

出席者：8名（順不同・敬称略）

<業務実施者>

木村（PONPO）、土田（関西大）、神崎（PONPO）、丸山（PONPO）

<外部評価委員>

安部（関西大）、定松（東大）、新澤（デロイトトーマツリスクサービス）、
松田（元原子力委員）

配布資料

- 1-0. 議事次第
- 1-1. 業務計画書
- 1-2. 平成25年度メンバー表
- 1-3. 進捗報告（パワーポイント資料）
- 1-4. シンポジウム配布資料一式
- 1-5. 平成25年度PO中間フォロー 研究管理表
- 1-6. 平成25年度PO中間フォロー 経費使用状況調査票
- 1-7-1～1-7-2. 第1～2回業務推進全体会合議事録
- 1-7-3～1-7-8. 第1～6回フォーラム研究会議事録

議事

- 1. 平成25年度業務の概要について
- 2. 進捗状況の報告
- 3. その他

1. 平成 25 年度業務の概要について（配布資料 1-1、1-2）

木村氏より、資料 1-1 に基づき、今年度の業務の概要が説明された。

2. 進捗状況の報告（配布資料 1-3、1-4）

木村氏より、資料 1-3 に基づき、今年度の業務の進捗状況が報告された。

その後、実際にシンポジウムで用いられた資料に基づいて、木村氏、土田氏から、フォーラムの実施状況についての説明がなされた。

今後の研究の方向性などについて、活発な議論がなされた。以下に主な意見を示す。

【研究全体について】

- ・ 計画通り順調に推移しているように見受けられる。
- ・ 外部への成果発表は重要だ。特に、日本原子力学会誌アトモスは、専門家でない方が読むことも想定して編集されており、社会に対する影響は大きいだろう。
- ・ ホームページの閲覧状況はどうか。
→アクセスカウンターはつけていない。フォーラム参加者の数名からは、閲覧したと聞いている。フォーラム参加者が、公正に公表されていることを知り、安心を得る、という材料としてはある程度機能したと考えている。
- ・ 原子力のリスクコミュニケーションの専門家と、原子力以外のリスクコミュニケーションの専門家の間で、原子力に対する考え方のギャップがあるように見受けられる。本プロジェクトのホームページは、リスクコミュニケーションの専門家にとって、自分の活動を振り返るいい材料になっているのではないか。
- ・ ムラそのものではなく、ムラの境界に着目したという問題設定について、シンポジウム出席者の反応はどうだったか。
→「ムラそのものが改善されなければいけないのではないか」という意見がみられた。
一方、「ムラではなく、ムラの境界に着目した研究であることは理解できた」という意見もあった。
- ・ 「思い込みをどう乗り越えていくかを示すことが、本研究の一番の目的」とあるが、乗り越えた先の展開については、どのように考えているか。
→現状、原子力業界に対する強い不信がある。まずは、まともなコミュニケーションができるような枠組みを目指したい。次の段階としては、リスクガバナンスの枠組みへの発展を検討している。
→それができれば、他分野での応用も可能だろう。将来有望な研究テーマと感じた。
→今回のコミュニケーション・フィールド自体も、プロフェッショナル（原子力の知識を網羅している人や、地域で精力的に活動するリーダー）がいなくても成立する、という強みを持っていると考えている（「人」に頼らない枠組み）。

- ・ 今回は首都圏住民と分野を特定しない専門家が対象だが、今後、地域への展開は考えているのか。
 - 今回は首都圏住民が対象であったため、リスクの範囲が不明確で、専門家の範囲も広く設定した。地域で行う場合は、住民のリスクが明確化してくるため、専門家の範囲も自ずと絞られてくるだろう。ただし、いきなり意見を戦わせると住民と専門家の間で対立構造が生まれてしまうおそれがある。それを防ぐためのコミュニケーションの導入方法、作法については、今回の枠組みの中から応用できる部分があるのではないかと考えている。
- ・ 地域への展開を考えるならば、今後は話し合いのテーマを絞ってみてはどうか。例えば「低線量被ばくのリスクをどう考えるか」というテーマで、専門家と一般市民のギャップを話し合うことは、福島の問題に対しても活かせるのではないか。
- ・ 原子力分野は複雑、かつ、範囲が広い。特に、原子力分野に興味を持たない一般の方にとっては、「よく分からない」ものだろう。
 - 専門家間でも情報交換は少ない。どこまで分かっている、どこから先は分かっているのか、「知識の棚卸し」をし、科学技術のプラットフォームを作ることが求められている。(その次の段階として、社会的なプラットフォーム作りも目指したい)
 - 原子力の専門家は個々の専門分野に長じており、原子力分野全てを把握しているわけではない、という現実がある。しかし、それらの個々の知識をどのように統合していくか、具体的なビジョンがないと、信頼は得られないのではないか。

【フォーラムについて】

- ・ フォーラムの記録を見たが、A氏、B氏…などの区別をつけず、完全に匿名にしているため、例えばA氏がいつ、どのような発言をしているのかは分からなかった。せめて記号を割り当ててはどうか。
 - 第1回から第5回を通じて同じ記号にすると、個人像がかなり特定されてしまうと判断し、完全匿名にした。
 - 回ごとに独立して、人物の区別をつけたほうが、議論の展開が分かりやすいのではないか。(第1回のA氏と第2回のA氏は別にする等の対応)
- ・ フォーラムの分析をする際は、各個人の発言を押さえて行うのか。
 - 各個人がどのような発言をしたかは、内部データとして保有しているので、それに基づき分析を行う予定。
 - 社会調査の結果と、フォーラムでの発言内容をマッチングすることも可能であるが、対象数が少ないこともあり、どの程度分析を進めるかは慎重に判断したい。
- ・ 従来の公聴会などでは、「原子力は是か非か」など、結論を求めて議論をしていたために対立構造を生んでいた。今回の枠組みは結論を求めなかったが、そのほうが参加者同士の対話が円滑に進む、ということが示唆されたのではないか。

- ・ シンポジウムに出席したフォーラム参加者から、「今日の話聞いて、様々な背景が理解できた」という意見が聞かれた。
→5回のフォーラムを経験したからこそその意見だろう。例えば、第1回フォーラムで同じ話をして理解されなかったのではないかな。

【社会調査について】

- ・ 高レベル放射性廃棄物の処分に対して、3.11以降、首都圏住民が前向きな意見を増やしたのは、いわゆる除染廃棄物と混同しているからではないか。
- ・ フォーラム参加者と社会調査の母集団の意見分布を比較しているが、フォーラム参加者の意見はどのタイミングで測ったのか？
→比較しているデータは、フォーラム開催前に取ったデータ。その他に、各回終了後に1回ずつ、全フォーラム終了後に1回、計7回測定している。
- ・ 7回の測定で、参加者の意見・意識の変化は見られたか？
→大きな変化はない。また、フォーラムの目的は個人の意見を変えることではない。ただし、「原子カムラ、原子力の専門家に対する理解、信頼が深まったかどうか」は重要で、次年度はそういった点も調査していきたい。
→「意見の異なる相手同士が理解を深める」ことは、様々な問題を考える際の出発点になる。この手法は多様な問題に応用可能だと感じた。
→フォーラム終了後のインタビューの中では、「相手（市民または専門家）に対する思い込みがあったが、それが必ずしも全員に当てはまるわけではないことに気づいた」「境界は乗り越えられるのではないかな」などの意見が挙げられていた。
- ・ 意見・意識の変化には、フォーラム外（懇親会、往復の移動中等）の効果が大きかったのではないかな。研究としては測定できない部分だが、無視してはならないし、重要な要素だ。インタビュー等でその効果を聞いてみてはどうか。

3. その他

木村氏より、第2回外部評価委員会の日程（2014年3月17日（月） 15:00～17:00）が告知された。

以上